大学英語教育学会

(JACET)

創立20周年記念誌

The Japan Association of College English Teachers

1981

目　　次

第 1 部　所感：20 年を回顧して

JACET 創立 20 周年に臨んで ……会長　小川芳男　3
JACET の思い出……顧問　朱牟田夏雄　4
随　　想……理事　天野一夫　5
教材研究委員会略史……理事　原沢正喜　6
JACET のルーツ……理事　星山三郎　7
JACET の意味……理事　梶木隆一　8
夏期セミナーの誕生……理事　岸沢　栄　9
JACET の名付け親は誰か……理事　山田和男　10
「関西支部」創立 ……前関西支部長　大浦幸男　11

第 2 部　JACET の諸活動

JACET 運動のうねり …… 12
大学英語教育学会　大会…… 14
大学英語教育学会　夏期セミナー・秋期セミナー…… 16
大学英語教育学会『紀要』 …… 19
大学英語教育学会『通信』 …… 24
『英語の評価と教授』出版…… 25
入試問題検討委員会…… 25
月例研究会…… 26
教材研究委員会…… 31
テスト研究開発委員会…… 31
大学英語教育に関する実態調査委員会…… 33
日本英語教育改善懇談会…… 34
海外資料研究会…… 35
JACET 賞について…… 36
関西支部 10 年の経過 …… 37
JACET 年譜…… 39

第一部　JACET 創立 20 周年に臨んで

小　川　芳　男

二十世紀にはいり話し言葉が重視され口頭教授法などが叫ばれるようになった。特に第二次世界大戦後は応用言語学の著しい発展と共に外国語の教授法が脚光をあびるに至った。このような時代的背景のもとに JACET が生れた。

私が初代会長朱牟田夏雄氏のあとをうけて会長になったとき「私の後半生を捧げる」という意味の挨拶をした。ながく英語教育に関心をもち，わが国の英語教育の発展のためにささやかながら努力してきた私のいつわざる心境であった。大学の英語教育が日本の英語教育の源泉であると信じたからである。英語教育の成否は中学にあると思うが，中学の英語教師を養成するのが大学である。大学は「研究と教育」の府であるといわれながら，教育面が比較的軽視されていた当時としては教育面の充実が英語教育の発展に不可欠と考えたのである。従って発足当初は，教授法の面の研究を重視した。しかし，教授法が進んでくると学際的な面を最も必要とする語学教育においては関連学科の研究が必要であり英語教授法のみならず，言語学，英語学，心理言語学，社会言語学，英米文学，文化人類学，地域研究などと研究の範囲は広がった。

また英語教育の改善のためには制度面にも注意を向けなければならなくなる。今日まで JACET が実施または提案したものに入試制度の改善，望ましい一クラスの人員数，音声重視のための聴解テスト教材研究とその成果の発表，月例研究会および夏期のセミナーなどがある。特に summer seminar は English village 方式で全員合宿生活のため親睦を深めることにもなり，全国的に広がった seminar の参加者が今や会の中核となって活躍している。また毎年招致する英米の distinguished scholars は例外なく JACET の honorary member となるので会員網は世界的となっている。従って外国の学者との交流も国際的となる。また単に学者との個人的交流ばかりでなく外国の学会との交流も遂年盛んになりつつあり，JACET は二十周年を期にターニング・ポイントになっている。JACET の今後は国内の活動と同時に国際的に活動する面が多くなることを信じ且つ期待する。

JACET の思い出

朱牟田　夏　雄

大学英語教育学会の創立は 1962 年の秋であった。前身は語研の大学部で，同部の活動が，中・高の英語教育を扱う部門に比してとかく不活発だったことから，むしろ独立の機関を作って語研から独立させたほうが，という発想が生まれた。この発想の提唱者ないし推進役は，小川・梶木・星山・芹沢の諸氏だったと思う。JACET の生みの親たちである。

私自身は当時語研の理事を辞した後だったが，思いもかけずこの新団体の会長たることを求められた。適任でないことを自らよく知っていた上に，その頃たまたま東大教養学部長の職にあって（1960 年 4 月 ～ 63 年 3 月）全力投球を強いられてもいたから，ひたすら固辞したけれども，上記諸氏の勧誘説得は執拗をきわめ，結局は上記の職から解放されるメドが立ったという条件で口説き落とされる羽目となった。そういうことから，62年秋の発会式が外語大のたしか新築の講堂で行なわれたときには，私も列席はしたが会長は空位のままだったと思う。翌年の 2 月に至って，私のあとの学部長もきまり，3 月一杯で重職から免ぜられることが確定したので，会のほうにそのことを申し出て，正式に会長をお引受けした。その時期が 3 月だったか 4 月だったかは記憶しない。

学会の発展ははじめは遅々たるものであった。私ももちろんだが前記推進役の諸賢がみな50歳を越えており，入会者にも各大学の主任級の人が多くて，いわば頭だけが大きく，手足となって活動してくれる人材に乏しかったことが，大きな原因であった。そのうちに67年に至って，Fulbright 委員会から資金の援助を得て第 1 回の夏季セミナーを開いた。この時の受講者の中に，小池・松山の両君をはじめ，後の本会の活動の中心になる若い諸君がいたことが，会を目ざましく発展させる大きな機縁となった。かえりみて重要な転機だったと思う。

私自身は翌68年に第 2 回セミナーを開いた後，同年秋，はからずも Fulbright 委員会事務局の元締に就任することになった。そうなると，資金を援助する側とそれを受ける側との責任者が同一人物であることは何かとまずい（早い話が JACET にぜひ援助をと強く主張しかねる）ので，これを機会に当会の会長を辞した。小川氏という絶好の後継者を得て，その後本学会がきわめて順調な歩みを見せていることは，ご同慶の至りである。

随　想

天　野　一　夫

JACET の英語聴解力テストの研究と開発。たぶん研究企画委員制ができたときであったと思います。委員会のその年の活動の一つとして大学，短大の学生の英語の聴解力の全国的調査をしました（1969）。五十嵐康男君が調査委員会代表であったと思います。五十嵐新次郎さんとわたしが顧問でした。これが以来ずっと続いているこの委員会の活動の始まりであったと思います。1971年から72年には COLDT と協力して，speaking を除いた三技能の大学，短大生対象の全国調査をしたこともありました。1969～70年の大学，短大一年生の聴解力の発達状況に関する調査は“JACET–COLTD Listening Comprehension Test. Form A”（1974. 10）と“Form B”（1980. 8）の構想を生む重要な動機であったと考えています。COLTD との協力はテストの問題を客観性に富んだものにするのに寄与したばかりでなく，たぶん COLTD によって，初めて究明された日本人の英語使用に関するいくつかの心理的特徴を問題の形式などに採りいれて，“Form A”，“Form B”の基本的特徴にすることができました。

さて委員会は1981年度の研究テーマとして大学入試で聴解力テストを実施するための基本的，具体的問題の研究を選んで，着々成果を積んでいますが，この12年間取り扱ってきた英語聴解力の研究についてはまだ究明すべき重要な面がいくつも手つかずに残されています。たとえば外国語の聴解といっても従来実施してきたのは音声テープの再生音というメディアを通しての理解という範囲のもので，音声の送り手と受け手の対面という人間コミュニケーションにおける重要な要素を欠いています。人間のスピーチの音声のこのような扱い方は日本における一般的な英語学習の仕方を考えるとき，このようなテストの受け手に対して言語の自然な習得と発達を無視したともいえる行動を要求するものであると考えます。したがってそのようなテストは聴解力の可能性の適正な発達を促進するよい方法とは考えられません。この点については音声化する内容と文体との関係も考え合せることも必要でしょう。どういう内容，文体のものは対面を必要とし，どういうものは必要としないか，などを徹底的に究明することが必要だと考えますが，いかがでしょう。国際的，学際的規模でやりたいものですね。

教材研究委員会略史

原　沢　正　喜

1,000 名を超える会員を擁しつつ先には関西支部を発足させ近く東北支部をも発足させようとしている JACET がここに創立 20 周年を迎えることはまことに慶賀に堪えない。このような目ざましい発展は朱牟田前会長・小川現会長の非凡な leadership によることは勿論であるが理事会・研究企画委員会，特に 100 名に垂んとする研究企画委員会諸君の若々しい情熱と無償の奉仕の結集による点が極めて大であると思われる。

私が小川会長の依嘱をうけて理事になったのは今から13～4年前のことで，当初の数年は特定の分担業務を持たないいわば無任所理事であったが，教材研究委員会が発足してからは専らその方を担当することになって今日に及んでいる（当初は委員長であったが 今は顧問に後退している)。発足当初から 何れ将来大学生用のテキストを編纂するという含みはあったがそれもまだ具体化していなかったので教材の理想像を求めて私が「試案」を発表したり田島主任がアンケート調査をしたりしていた。田島君の外遊中に愈々教科書を出版することになって教材班は急に活気を帯び，陣容も次第に充実して来た。前者を便宜上田島主任時代と呼ぶなら後者は奥津主任時代と呼ぶことができる。

従って教材委員会の正式な報告は奥津主任委員から出されると思うので，ごくかいつまんで述べると委員会は過去に三冊の模範的と思われる大学教科書を出版し，そこで一段落として，その後は大学一般教育英語購読教材のあり方について撓みない努力・研究・調査・討議を重ねてきた。この後者の作業の一応のまとめは本年度大会時に紀要と共に配布される予定である。これまで一年半に亘り毎月一回必ず語研や大妻女子大の研究室に集まり，誰かが何かのテーマについて研究発表を行い，それを全員で討議して来たのみならず語研でまる二日，それに都内と箱根のホテルで各 1 泊の合宿までやって来た。以て委員諸君の熱意の程が偲ばれよう。委員の数も次第に殖えて最近は15名程になっており，しかもその中に女性委員が 5 名も含まれていて enviable なまでに華麗な研究委員会となっている。老子の教えるように，もし陰陽調和して天地の道生ずるものであるならわが教材委員会の前途は正に洋々たるものであると言っても決して言い過ぎではないと思う。

JACET のルーツ

星　山　三　郎

JACET の誕生は一応昭和37年（1962），11月9日（金）の「大学英語教育研究協議会」の総会（於東外大）においてと云うことになっているが，そのルーツを辿ると，どうも語研の大学部会の発生にまで遡らなければならぬようである。この部会の発芽は実に半世紀以上も前の大正15年（1926）に開かれた第3回英語教授研究所（語研の前身）の大学部会（当時はこれを 上級学校部会」と呼んだ）にあるように思われる。そこでは東京高校（東大教養部）の沢村寅二郎氏が座長となり英語教育の改善について話し合った。

次に改革の実践面では昭和9年の大会における東京高師の寺西武夫氏，11年には沢村寅二郎氏と横浜専門学校の江本少佐，12年には横浜高商の西村稠氏が Oral method による授業の公開をしている。更に14年には一高（東大教養部）で片山毅氏（英文解釈），井上思外雄氏（英作文）か担当の授業を公開した。

それから間もなく太平洋戦争が起き，東京は焦土と化し，語研も大会を開くどころではなかったが，終戦後息を吹きかえすと，昭和24年には大学部会を開き，高橋源次氏を座長として各大学の実情を話し合った。

25年11月の大会は学習院大で開かれたが，その大学部会（参加者40名）において星山（名古屋大学）は語研の求めに応じ「教員養成を目的とした英語科の内容を如何にすべきか」と題し，目的・教材・教授法について発表。この頃より次第に語研の大会では大学部会が持たれ，次のような問題が討議された。

昭 29：「教師養成の方法について」（座長　萩原恭平）

昭 30：「如何にして英語教育に対する社会の要求にこたえるか」（座長　小川芳男）

この頃より組織的な学会創設の気運が生れる。

昭 32：学芸大石井正之助氏による Oral method の授業

昭 33：早大中尾清秋氏による授業と質疑応答

昭 34：津田の天満美智子氏による Oral method の授業

昭 35：「大学における英語教育のあり方」（司会　芹沢　栄）

その後の大学部会は自然発生的に JACET の大会に移行して行った。昭和37年以降の動きについては，別記「大会」の項にゆずる。

JACET の意味

梶　木　隆　一

私は戦前戦後を通じて成城，一高，東高，成蹊などの旧制高校を始めとして，東京外大，東大，早大などの新制大学で長い間教壇に立ちながら，絶えずいくつかの矛盾を感じていた。その一つは，英語が第二の国語と言われるほど普及したにもかかわらず，一般に学生の英語学力はあまり伸びないで，最近ではむしろ低下の傾向が見えることである。もう一つの点は大学側にあり，英文学や英語学の研究は盛んであるが，その基盤になるべき英語教育はあまり問題にされなかった。また中・高・大の縦の連絡もほとんどなく，大学入試にはかなり無理な出題が跡を絶たない。

そこへ大学紛争の嵐が全国に吹き荒れて，大学教育のあり方が否応なしに見直されることになった。英語教育も従来のままでよいはずがない。教師が学生の要求や実力を考慮しないで，自分の好きな教材を用いて勝手な授業を平気で続けるような時代は終わった。言うまでもなく，大学の教職にある者はすぐれた研究者であると同時に，良い教師でなければならない。この点を改めて認識した上で，大学の英語教育の改善と発展を目ざす気運が高まったのは当然と言えよう。それを推進する適当な組織を求める声も次第に強くなった。つまり大学英語教育学会は当然生まれるべくして生まれたわけである。

学会が成立して間もなく，英語名を Japan Association of College English Teachers とすることが異議なく決まった。その略称 JACET は今では広く通用して，外国でも知られるようになった。JACET は作った頭文字語であるが，ペンクラブの P.E.N. と同じように，それだけで何か意味をなさないものかと考えたことがある。残念ながら英語には該当する語がないけれども，ラテン語として見ると to lie の意味を表わす自動詞 jacere の変化形である。たとえば，Lucretius が残した句に "nudus humi jacet" というのがある。文字どおりには「裸で大地に横たわる」という意味であろうが，少しこじつければ JACET の活動とまんざら無縁ではないように思われる。つまり従来の定設や偏見を捨てて，裸になったつもりで原点に立ち帰り，いたずらに高い空を見上げることなく，足もとに目を向けて実情から離れない態度を述べているようにも解される。そこに今後の JACET の使命があるとも言えるだろう。

夏期セミナーの誕生

芹　沢　　栄

1966年（41年）秋，フルブライト委員会のバーネット氏が東京教育大の外語研（外国語教育研究施設）を訪ねてきた。フルブライトのサマー・プログラムとして，大学の英語教師を対象とする講習会を開くことを考えているが，外語研の協力を頼むという申入れである。

当時，外語研は，大きなプログラムを抱えていて，申入れを引受ける状態にはなかった。しかし，私は，これは JACET にふさわしい仕事と考えた。朱牟田（初代）会長と連絡。理事会も賛同。翌1967夏，フルブライト・JACET 共催第一回 Summer Institute が発足することになった。JACET Seminar の誕生である。JACET 生後5歳のとき。

バーネット氏が，最初，打診の際に持ち出した条件は次のようである。

対象は，前記のように，大学の英語教師。日本における英語教育を検討し，その発展に貢献することを目的とする。参加者としては，外遊の経験のない者（当時は現在ほど外遊経験者は多くなかった）ものを優先する。合宿して，英語を話す生活をする（English Village の構想），外遊未経験者に対し，oral practice の機会を与えようという狙いである。

一般に，語学専攻の教師は，教授法に関心を持っていることが多いが，文学専攻のものは，無関心であることが多い。文学専攻のものを多く，参加させたいという意向。第一回セミナー応募者 120 名中32名選抜には，このような条件が勘案された。

当時，フルブライトの申込みは，経済面でも，おおらかなもの。参加費はすべて無料――宿泊費・交通費・参考書費，等すべて。それに，「夏休みは，大学の先生方は，アルバイトをして稼ぐのでしょうから，小遣いを差上げることはどうでしょうか」との提案。当時，教師のふところは，豊かではなかったが，さすがに，これは笑いをもって辞退。さらに，「ただ」のものは軽視しがちになるものと，考えて，名目的に 3,000 円の参加費を申受けることにした。その後，参加者は宿泊費なども支払うことになり，それも年々増額されているが，実際は，それに倍する金額が，後援者の好意によって支出されていることを，感謝をこめて，披露しておきたい。

JACET の名付け親は誰か

山　田　和　男

この創立20周年記念号に何か思い出話を書けということで，他に思いつかないので上記のことについて書かせていただく。

この学会の英語名をきめることが重要な議題の一つであった理事会か何かに出席して，the Japan Association of College English Teachers を候補にもちだして他の方々の賛同をとりつけたのは山田である。それは山田がラテン語の hic jacet という言葉を知らず，the Japan Association ... の acronym が抹香くさい連想をともなう危険のあることに気づかなかったためである。いつ頃からか知らないが，こういう説が一部の会員の間に行われているらしい。

これに対する私の答は Yes and No. である。確かにこの名前（full name の方）をいい出したのは私である。これは，この学会の今日の隆盛ぶり，日本の英語教育界に占める輝かしい地位を予見することができなかった私の想像力の貧困さを示すもので，今日の――というのは特に若い，会員諸氏に対して，こんなケチな名前をつけたことを（もちろん私一人でやったのではないが），まことに申し訳ない気がしている。しかし，創立当時としては決しておかしな名前ではなかったし，今でだって問題は名前ではなく中味である。それに何事においても overstatement より understatement の方が品がよいということもある。そう思っていただければ幸いである。

以上は Yes の内容の説明だが，No に関しては，私が hic jacet なる言葉があるのを知ったのは，50数年前外語に在学中，有名だった英国人教師 Medley 先生の elocution の時間に Hazlitt の随筆 *The Indian Jugglers* の一節を習った時で，今でも先生が "Let no rude-hand deface it, / And his forlorn 'Hic jacet.'" と朗々と読まれた声が耳に残っている。こう書くだけですむ。ただ，あの時，昔からどんな時にも頭の回転のおそい私には，*MLA* と同様，正式名より acronym の方が余計に口にされるようになろうとは，遂ぞ思い及ばなかったということ。それから，理事会の席上で最初に 'JACET' といって見て，「これはいいやすくていい」といったのは星山さんである。そのあとも何度も繰り返した。それで私の原案が採択になったということを付記させていただく。こういうゆくたてから，私は JACET の名付け親は星山さんだと思っている。

「関西支部」創立

大浦幸男

私がJACETの会員になったのはかなり古いが，評議員になったのは昭和44年である。JACET 創立以来評議員として京大からは，私の同期の同窓である川田周雄君が出ていたが，私が英語教育にかなり関心があったので，同君に頼まれて評議員を引受けることにした次第である。従って，私の評議員としての期間は割合に短かく，昭和44年10月17日の学習院大での大会のとき評議員会に出席，初めて小川会長始め諸先輩に会ったのである。

ところが，早くもその翌年には，関西支部を作りたいという本部の要望が，小池さんから多田さんへ，ついで私に伝えられた。その結果，小池さんの斡旋で，昭和45年11月1日夜，成城大での日本英文学会の後の椿山荘での研究社のパーティーを利用して，小川先生に会い，お話をまず拝聴ということになった。そのときは，小池さん，多田さんと私の他に，星山・三戸の両先生が同席されたが，もっぱら話し手は小川先生で，関西に支部を作り，JACET の活動を弘めることがいかに日本の大学の英語教育，ひいては日本の将来に重大であるか，というようなことを熱弁を振って語られた。茫然として聞きほれているうちに，先生はつと時計を見て，これから夜行で新潟へ行かなければならぬのでと，走るがごとく立ち去っていかれた。

会長の情熱に動かされて，多田さんと私は，何んとかしなけりゃいかんと考え，支部創立についての懇談会を開くことにした。その結果，翌46年2月21日に京都の御車会館で有志20名余が集まり，討議の結果，春秋に支部大会を開き，講演と研究発表をすることにした。その第一回は同年6月19日に京都の平安女学院大で，第2回は同年12月11日に関西大の大阪・天六校舎で開いた。大体こういう具合でやれそうに思ったので，翌47年6月24日平安女学院において，関西支部発会式と春季大会を行なった。

図らずも，私が初代支部長に推され，昭和56年3月まで思わぬ長期間つとめることになった。しかし，支部のかなめは多田さんであり，同氏の献身的努力によって関西支部が現在のような発展をとげたことは周知の事実である。10年間の支部活動については，多田さんが書かれるはずだから，私は支部創立当時の思い出を記すにとどめたい。

第二部　JACET 運動のうねり

本学会は本年11月13，14，15日に早稲田大学で開催される年次大会で，創立以来20回目の大会を迎える。まさに，青年期である。1962年11月９日，東京外国語大学で開催された「大学英語教育協議会」の席上で，わが国英語教育界ではじめての「学会」として「大学英語教育学会」の結成が決議された。この母胎は語学教育研究所の大学部会であった。それ以来，幾多の試練を経ながら，今日押しも押されもせぬ大学会に成長したことは，会員一同まことにご同慶に堪えない。発足当時の会員数120名。今日，約1,150名。全国の大学英語教員の６人強に１人が本学会の会員である。しかしながら，研究と教育に責任をもつ主な英語，英文字の教員は，学生を前にした時，何をどのように教えるべきかを自ら問わなければならない以上，本学会の使命もさらに大きく，会員数もますます増加すると期待される。いうまでもなく，本学会の目的は，大学における英語教育の改善である。そして，また，わが国英語教育全体の改善である。本学会がもつ使命もまた大きいと言わなければならない。この立場から，JACET 活動の歴史を鳥瞰し，今後の活動の反省としたい。

さて，年次大会は，年々大きく，活発になっている。昨年の岡山大会は，参加者約600名，研究発表約30と大変な盛況であった。本年も発表者36を数え，大会２日に加えて，さらにはじめての授業研究を前夜祭として行うことになっている。また，学会活動の柱の一つである夏期セミナーは，本年で15回目を終了したが，参加者は，合計約450名となり，文字通り，JACET 運動の推進力となっている。たとえば，第１回，第２回参加者の東京在住者が中心となってつくった研究企画委員会の活動が何よりもそれを雄弁に物語っている。今日委員は，全国に及び約70名，JACET 活動の企画，実施を会長，理事会，評議員会の指導，助言のもとに活発に行っている。セミナーで，同じ屋根の下に２週間，３週間と暮し，同じ釜の飯を食べた者同士の共同意識は，深い友情の絆を全国にめぐらせ，学会多しと言えども，このような連帯意識をもったところは，ほかにないといわれるほど，ユニークな存在となっている。しかも，毎年１年を費して，資金を集め，セミナーの運営に無償の奉仕をし，献身する精神は，他の追随を許さない「JACET スピリット」を生み出している。

研究企画委員会が行うさまざまな活動の若干を説明すると，まず，代表幹事を中心として会務にあたる部門と，研究，サービス活動の部門がある。テスト

開発委員会は，過去10年以上にわたり，大学生のための標準聴解力テスト Form A と等値の Form B を作成した。これは極めて信頼性の高いもので，受験者は1回で1万人を越すに至った。さらに，ヒアリングテストを入試に導入することを可能にする環境条件整備のための実験をはじめている。さらに，教材開発研究委員会は，諸活用のテキスト3冊をつくり，使用結果もあわせ，報告書を提出している。大学における教材，教授法の参考基準を設定しようという野心的な試みである。大学英語教育の基礎実態調査は1969年に第1回を行ったが，20周年を記念し，より大規模に行うべく準備中である。紀要は年間1回発行，今日は12号を出した。JACET 通信は年間4回が3回に減ったものの，すでに No. 41 の多きを数えるに至った。その他の出版物としては，入試問題検討集が2冊，研究物が1冊，教材が4冊である。海外資料研究会は，「英語教育」誌上で毎月「海外論考探訪」を行い，1981年10月号で38回を教えている。いずれ単行本になる日が来るであろう。東京で行われている月例研究会は通算66回，このほかに海外からの著名な学者による公開講演会もさかんである。たとえば，Robert Lado, Paul Pimsleur, Kenneth Pike. Walter Cook などのほかに，John B. Carroll の連続特別セミナーでは，「大学入試改善の基本的見解の表明（1969. 11. 12）を行い，新聞記者会見が行われた。また，毎度セミナーに来日する著名学者は，公開講演会を行い，全員名誉会員になっている。総数26名である。 これらの学者による英米，東南アジアでの JACET についての口コミは，いつのまにか，JACET の名を海外でひろめる結果になり，本学会の国際化への直接間接の原因になっている。また，上智大学で行う言語学者の公演も後援しており，この人を入れると，数はさらに増えよう。JACET の国際的活動への勧誘は，現在あり，慎重に対応している。すでに，ハワイでも JACET セミナーを行っており，会員の海外での経験者もすこぶる多いので余地は十分にあると思われる。支部としては，関西支部が創設以来10年以上になり，豊富な人材をもち，活発な活動を行っている。春，秋2回の支部大会に加え，最近では研究会，プロジェクトもおこすべく準備中で，一層活発になるであろう。東北支部は，昨9月12日に発会式を東北学院大学で行った。参加者40名余。年1回の大会と，研究会を行い，東北地方6県にまたがる英語担当の大学教員に参加を求め，声をかけていこうと決意表明を行った。中京，北海道，九州，四国地区と支部がつくられる日もそう遠くないであろう。

JACET は「地の塩」の運動をやってきた。多くの人々の夢と献身と，それによる大いなる誇りと慶び。これこそ JACET の生命である。それは多くの

人々の連帯感をよびおこした。学会内ばかりでなく，他の英語教育団体に対しても同じである。英語教育改善懇談会の創設を呼びかけ活動に協力してきたのもその一例である。私たちは，まだまだやらなければならないものがあることを自覚している。私たちが，まだまだ非力であることも知っている。しかし，つねに前進してきたというひそやかな自信ももっている。JACET は，明日からも，着実に一歩一歩進みつづける。なお，『通信』次 42 号に新会則が掲載される予定であることを付記する。　　（小池生夫　記）

大学英語教育学会　大会

例年，秋に開催されている大会は，本学会の揺籃期ともいうべき第 1 回から第 6 回までは，「総会」と呼称されていた。回を重ねるごとに研究発表の数も増え，「大会」の名に相応しく，より大規模で内容の充実したものに発展してきたと言えよう。各大会の開催期日と場所，特別講演，主な研究討議のトピックスは，下記の通りである。

第 1 回大会（1962年11月 9 日，東京外語大）

協議：「教養課程における英語教育」「発表力の養成」「入学試験」「教職課程における英語教科教育法」

第 2 回大会（1963年11月 8 日，法政大）

講演：'Observations on English Teaching' (E. A. Richter)「英国生活一年をかえりみて」（半田一郎）

協議：「英語教育の目標を達成する手段として，どのような教材が適当か，次のような種類の教材を使用する場合の得失はどうか。(a) 小説 (b) 随筆 (c) 論説 (d) 新聞 (e) 劇 (f) 詩 (g) その他」「作文・文法については，いかにするか」「視聴覚教材はいかに利用するか」「Extensive Reading の問題」

第 3 回大会（1964年11月 6 日，東京外語大）

講演：'Modernization of Foreign Language Teaching in U.S.' (Charles B. Fahs)

協議：「大学英語教育における問題点」「外人教師と日本人教師との協力」「短大における英語教育」

第 4 回大会（1965年10月15日，東京大・教養学部）

講演：「英語教育の目標」（中島文雄）「カナダの大学における英語教育」（平野敬一）
協議：「入試問題の改良すべき点」

第5回大会（1966年10月16日，明治学院大）
講演：「最近の国際状勢」（前田義徳）
協議：「訳読の問題」「大学における英語教育の組織化について」

第6回大会（1967年10月16日，東京大・教養学部）
講演：「英語教育と日本」（松本重治）
協議：「大学英語教育の目的再検討」「教材の問題」

第7回大会（1968年10月25日，明治学院大）
講演：「英語教育について」（坪井忠二）
シンポジウム：「大学英語教育の目標とカリキュラム」「大学英語教育学会の活動の現状分析と発展策」

第8回大会（1969年10月17日，学習院女子短大）
講演：'How to Improve College English Teaching in Japan'（小川芳男）
シンポジウム：「大学英語教育のカリキュラム改革についての諸問題」

第9回大会（1970年10月23日，慶応大・三田）
講演：'Contrastive Analysis of English and Japanese' (Kenneth L. Jackson)「海外からみた日本の英語教育」（堀江董雄）
討論：「わが大学の英語教育改善策について」

第10大会（1971年10月24日，日本女子大）
講演：「外国語の修得について」（西脇順三郎）
討議：「日本における英語教育――高校英語と大学英語の一貫性について」

第11回大会（1972年10月14日～15日，立教大）
シンポジウム：「大学の英語は選択か必修か」
パネルディスカション：「外人教師より見た日本の英語教育」

第12回大会（1973年10月27日～28日，東京学芸大）
講演：「ITC の結果から観た大学生の英語学力」（坪井忠二）
パネルディスカッション：「大学英語教育に何を期待するか」

第13回大会（1974年10月 6 日，平安女学院短大）
講演：'Problems of College Level English Instruction in Japan' (Christopher Powell)

シンポジウム：「大学英語教育と制度改革」

第14回大会（1975年10月5日，千葉商科大）

講演：「世界における英語」（中川　融）

パネルディスカッション：「一般教養課程の大学英語でどんな教材が望ましいか」

第15回大会（1976年10月10日，関西大）

講演：「大学英語教育に期待するもの」（岩井雄二郎）

シンポジウム：「大学英語教育における評価の問題」

第16回大会（1977年10月30日，成城大）

講演：「英語教育を考える」（加藤秀俊）

シンポジウム：「大学教養課程の英語教育をどうするか」

第17回大会（1978年10月28日～29日，竜谷大）

講演：「言語とリズム」（吉川幸次郎）

シンポジウム：「Japanese English をめぐる諸問題」

第18回大会（1979年10月20日～21日，国際基督教大）

講演：「国際化時代にそなえた大学教育」（松山幸雄）

シンポジウム：「学生の needs と大学英語教育」

第19回大会（1980年10月25日～26日，ノートルダム清心女子大）

講演：'Applications of the Communicative Approach' (Pauline Robinson)「英語教育と第5能力」（小川芳男）

シンポジウム：'The Role of the Native Speaker in College and University English Program'

第20回大会（1981年11月13日～15日，早稲田大）

講演：「国際化と語学教育」（永井道雄）　'Teaching of Foreign Languages for International Communication' (Félix Lobo)

シンポジウム：「国際化の中の英語教育」　（高木道信　記）

大学英語教育学会　夏期セミナー・秋期セミナー

1967年以降毎夏2ないし3週間の合宿によるセミナーを開催してきた。第11回のハワイ東西センターにおけるセミナー以外は，全て東京郊外八王子にある大学セミナー・ハウスが会場となり延人数450名がいままで参加した。第1回

は在日フルブライト委員会の全面的援助で出発し，第2回以降は同委員会に加え CCEJ, GECET, エンサイクロペディア・ブリタニカ社，パエディア社および学術振興会より財政援助をうけた。第2回以降は以前にセミナーに参加した者が自発的に無償で事務局を構成し，また本部や支部の委員となった。以下(1)主任講師 (2)ゼミ外人講師 (3)特別講師 (4)事務局長の順で簡単に過去15回の記録を記す。

第1回 (1967；7・17～8・4) (1) W. Nelson Francis (2) Swardson (3) 朱牟田夏雄・小川芳男・芦沢 栄・星山三郎 (4) 田中春美

第2回 (1968；7・15～27) (1) Albert H. Marckwardt (2) S. R. Daly, C. H. Hayes (4) 小池生夫・多田 稔

第3回 (1969；7・14～8・2) (2) C. S. Haynes, L. Brosnahan (3) 江藤淳・福田陸太郎・河崎一郎・安井 稔 (4) 松山正男

第4回 (1970：7・12～8・1) (1) Douglas Stout, John A. Stoops (2) B. E. Shelby, E. J. Lazar, Furbush, Payne (3) Mathy, Baird, 太田朗，原沢正喜，梶木隆一，朱牟田夏雄，宮部菊男，山田和男，小川芳男，芦沢 栄 (4) 池 稔，多田 稔

第5回 (1971；7・12～22) (1) Everett Kleinjans, Mark Lester (2) MacGraw 他2名 (3) 永井道雄，小原国芳，村田聖明，朱牟田夏雄，安井稔 (4) 筧 寿雄

第6回 (1972；7・26～8・12) (1) John B. Carroll, David McNeill, John A. Brownell, Douglas Stout (2) James B. Leavell, L. B. Inturrissi (3) 佐伯彰一，福島慎太郎 (4) 五十嵐康男

第7回 (1973；7・11～29) (1) Owen Thomas, Leon A. Jakobovits (2) Thomas Fitzsimmons, John A. Stoops, Peter Mann, Kathy Hanlon (3) 梶木隆一，田中春美 (4) 瀬川俊一

第8回 (1974；7・15～28) (1) Kellogg W. Hunt, Masanori Higa, Roderick A. Jacobs (2) George Hughes, Peter Mann (4) 瀬川俊一，田島 穆

第9回 (1975；7・13～26) (1) Ruth Crymes, Masanori Higa, Wallace L. Chafe, Bernard Choseed (3) 三戸雄一，田中喜男，寺村秀夫 (4) 瀬川俊一

第10回 (1976；7・18～31) (1) Charles J. Fillmore, Masanori Higa (2) Bernard Choseed, Miho Steinberg, John Nissels, Vance Johnson R. Thornton (3) 太田 朗，安井 稔，大山俊一，三宅 鴻，D.

Steinberg, C. V. Taylon (4) 森住 衛

第11回 (1977；7・10～8・22) 於ハワイ大学・東西センター (1) アメリカ言語学会夏期講座 (4) 森戸由久，田中春美

第12回 (1978；7・16～25) (1) Randolph Quirk, Clifford H. Prator (2) Bernard Choseed (3) Mark Lester, Peter Milward, 大橋健三郎，外山滋比古，朱牟田夏雄，桜庭信之，天野一夫 (4) 吉田正治

第13回 (1979；7・16～28) (1) Wilga M. Rivers, John O. McCormick (2) Erich Berendt, Joyce McDonnell (3) William Currie, W. A. Grrotaers, 福田陸太郎，原沢正喜，亀井俊介，ホセ柴崎，鈴木孝夫 (4) 高木道信

第14回 (1980；7・21～8・2) (1) Geoffrey N. Leech, George Lakoff (2) Erich Berendt, Janusz K. Buda (3) Bernard Choseed, Charles Hancock, 本間長也，比喜正範，佐々木輝雄，白井健策，末常尚志，(4) 楠瀬淳三

第15回 (1981；7・20～8・1) (1) H. G. Widdowson, R. J. Di Pietro (2) R. W. Thornton, J. K. Buda (3) 由良君美，Peter Milward，柴谷方良，沢田昭夫，西尾幹二，名柄 迪，長井善見 (4) 鈴木紘治

なお，主任講師は東京および関西で公開講演を行った。

秋期セミナー

1969年と1972年の秋にセミナーを行った。夏期セミナーと異なり他のいくつかの団体の協力参加を求め，また3～4日間の連続講義と討論を集中して行った。

第1回 (1969；11・6～8) 於大学セミナーハウス。(主題)「大学入試改善」(主任講師) John B. Carroll, (助言者) J. A. Brownell, F. Cammack, 小川芳男，波多野完治，(後援) CCEJ. (参加団体) 語研，COLTD, ELEC, 全英連，LL 学会，貿易研修センター，終了後に「大学入試改善の基本的見解」を声明し，またキャロル博士の講演を別項の如く，大修館より訳註を出版

第2回 (1971；11・20～23) 於 ELEC 会館。(主題) 言語テスト，外国語教育，応用言語学に関する講義と討論 (主任講師) R. Lado 参加者150名，Regents 出版後援 (司会) 羽島博愛，上田 稔，井上和子，安倍勇 (事務局長) 小池生夫 **(松山正男 記)**

大学英語教育学会『紀要』

1970年に創刊号を世に問うてから，わが学会の『経要』も今年で12号を数えることになった。以下1号より12号までの掲載論文一覧をして『経要』の歴史を物語らせることにする。

創刊号

古宮照雄・五十嵐康男・小池生夫：大学英語教育（一般教養課程英語）におけるヒアリング能力の現状とその発達に関する調査

大谷泰照：大学英語教育と能力別クラス編成

月山みね子：Language Laboratory において，思考力を養成するための教材の作成とその効果

Yoshida, Kazue: An Analytical Study of Motivation on English Language Teaching in Universities

Smith, Sargent: An Evaluation of High School English Language Education Made by College and University Students

小池生夫：大学英語教育における速読とライティングを中心とした多角的授業の研究

神山省吾：Freshman の英語教育（LL 併用英語四技能の訓練）

芳賀　純：2米国人幼児の言語発達の観察

竹蓋幸生：音響音声学から何を学ぶか

Kubota, Yasuo: A Syntactic Approach to the Count-Mass Distinction and its Pedagogical Application

吉田正治：英語の受動構造記述上の問題点

第2号

Milward, Peter: Suggestion for the Teaching of English

天野一夫・五十嵐康男・小池生夫・島岡　丘・鈴木　博：大学レベルにおけるヒアリング能力に関する調査（第2年次）——JACET・COLTD 共同実験研究——

Ayabe, Fumio: Encountering a Stranger—Language and Education

森永正治：大学英語について

Ike, Minoru: Some Considerations on the English Examination for College Admittance—An Interim Report

Okada, Sumie: The Appreciation of English Poetry
Kubota, Yasuo: An Interdiscipliary Approach to College English Education
Ichimura, Yoko: A Syntactic Study of Advervial Complements
Miyazaki, Kimie: A Comparative Study of the English and Japanese Verbs of the Five Senses Based upon the Componential Analysis of Meaning
＜書評＞
松田留男：James E. Alatis (ed.), *Report of the Nineteenth Annual Table Meeting on Linguistics and Language Studies* No. 21
橋内　武: Robbins Burling, *Man's Many Voices: Language in its Cultural Context*

第 3 号

Stoops, Alan: TESOL in the '70's: Some New Directions
坪井忠二・天野一夫・五十嵐康男・小池生夫・中山隆吉・島岡　丘・鈴木　博・田島　穆：大学レベルにおける 3 技能に関する調査（第 3 年次）——JACET・COLTD 共同実験研究
西川盛雄：Some Considerations on the Acquisition of the Second Language
安藤昭一：大学英語教育における速読指導——その意義・目標・効果・原理・教材・方法について——
Tsukiyama, Hideo: Some Experiments on Listening and Speaking Test
Richard, Linde: The Analysis of Grammatical Errors in Advanced Spoken English

第 4 号

Thomas, Owen: Models, Debates and Applications
Lester, Mark: Some Observations on English Language Testing
共同研究小委員会：大学生のための標準聴解テスト作成に関する研究——JACET・COLTD 共同研究——
梶木隆一：大学入試英語問題の検討——入試問題検討委員会報告——
Iijima, Yasuo: The Problems of Teaching English in Japan
Yoshida, Kazue: On Principles of Writing English Textbooks as a Second Language in the United States, Asia and the South Pacific Islands—From Elementary School to College—
Tsuchiya, Sumio: Some Aspects of Native Language Acquisition in Re-

ference to Foreign Language Learning
行広泰三：言語心理学面からの教授法設定の試み——Input, Process そして Output を中心にして
＜書評＞
榎本吉雄：Dn I. Slobin: *Psycholinguistics*

第 5 号

Hunt, Kellogg W.: Measuring Sentence Development
共同研究小委員会：大学生のための標準英語聴解力テスト作成に関する最終報告——JACET・COLTD 共同研究——
Nakamura, Junsaku: Man and Language in the Context of Language Teaching
伊藤嘉一：外国語教授法開発への序論 (1)——わが国における英語教授法の分析——
Horibe, Norio and Furuhashi, Satoshi: Hierarchy of Aural Perception Difficulties at Several Levels of English Teaching

第 6 号

Shibayama, Morijiro: On Contextual Orientation
Shimizu, Katsumasa: A Study on Sentence Stress in English
五十嵐康男：生成音韻論と英語教育
安田一郎：英語教育と言語理論の接点を求めて——文型分類の再評価——
筧　寿雄：文構成能力の発達——日本語の場合——
Crymes, Ruth: A Bibliographical Introduction to Sentence-Combining

第 7 号

Sato, Shiro: Current Studies on the Construction of Proficiency Test
Ichimura, Yoko: The Verb "*Be*" and the Prepositional Phrase as Complement
中山隆吉：英語教育の実践と error analysis
福本　一：神経言語学と英語教育
シンポジウム——新言語学と英語教育
1. 小池生夫：新しい応用言語学の方向（社会言語学の立場）
2. 伊藤健三：変形文法の言語理論・言語記述と英語教育（理論言語学の立場）
3. Lobo, Félix: Habits, Gramatical Competence そして Communicative

Competence（心理言語学の立場）

第 8 号

Miyazaki, Kimie: Two Types of Vowel Shortening Process in OE, ME and Mod E

Kubota, Yasuo: Classified Counting of Errors in Advanced Asian Students' English Composition

Fukuda, Shohachi: Aural Comprehension of Japanese English Teachers

吉田正治：英語の二重目的語構造における直接目的語省略可能性について

＜研究ノート＞

Watanabe, Tokio: 'Congress' and the Definite Article

中山隆吉： A. Grosu の内在名詞句制限

第 9 号

Prator, Clifford H.: The Pronunciation of English as an International Auxiliary Language in Japan

Shintani, Michiko: The Problem of Choosing between Extraposition and Subject Raising in English for Japanese Speakers

Nakamura, Junsaku: Formulaic Speech and its Importance in Teaching English

Tanaka, Sachiko: Some Notes on Code-Switching

寺田正義：英作文における不定詞補文について

久下沼　篤：分裂同格横文の主語の Headword になる名詞について

第 10 号

筧　寿雄，末延岑生，野間司郎，神崎和男，山根繁： 誤聴分析

Makino, Taka-Yoshi: English Morpheme Acquisition Order of Japanese Secondary School Students

Yoshimura, Noriko: Major Problems in Conducting an Error Analysis: A Discussion

Horiguchi, Ikiko: Infinitival Clause Complements: Aspectual Predicates

Mukai, Kiyoshi: Textual Cohesion and Sequence of Information: Analysis of a Passage

＜実践差告＞

Hirobe, Mitsuo: Integrated English

第 11 号

Oka, Hideo: Communicative Competence and Functional Approach to

English Language Education

Imai, Mitsunori: 'Conjunction + Participle' Reconsidered

Higuchi, Masayuki: A Textlinguistic of *the Miller's Tale*

<実践報告>

Tsukamoto, Tomoo: Teaching Reading at the College Level

川田秋子: 大学教養課程における英文作法のあり方について——英文作法3段階教授法——

第 12 号

国吉丈夫他：英語聴解標準テスト (B) 作成に関する報告

小池生夫： 第2言語習得過程の分析から見た英語教授法・教材材作成の新しい視点

村角洋子：「共感」と「ディクシス」——come と go に焦点を当てて——

Takanashi, Tsuneo: Developmental Stages of English Acquisition of Japanese Learners—with Special Reference to Speaking Ability Examined through Discourse Analysis—

Shimaoka, Takashi: Acceptable Japanese English—with Special Reference to A. C. Gimson (1980³)—

Uechi, Yasusada: Basic Language Outlooks in Contrast between English and Japanese-Speaking Cultures: Interrelationships between Cultural Thought Patterns and Linguistic Features

<実践報告>

McDonnel, Randall • Kimura, Kazuo • Ike, Minoru: On the Reliability of Objective and Non-objective Test —Analyses of English Entrance Exerminations—

Kakehi, Hisao • Suenobu, Mineo • Young, Roy • Kanzaki, Kazuo • Yamane, Shigeru: An Analysis of Perceptual Error—Learning Process—

<書評>

Nakamura, Junsaku: George Lakoff and Mark Johnson: *Metaphors We Live By*

創刊号より12号までの編集は，次にあげる諸氏の協力により行われたものである（○印は世話役)。

樋口時弘，伊村元道，伊藤嘉一，笠井貴征，加藤英夫，清川英男，○小池生

夫，升川　潔，松山正男，村田　年，中島　茂，中村　功，中村匡克，中山隆吉，岡田純枝，○鈴木紘治，○高木道信，○田中春美，田中幸子，田中駿平，若林俊輔，矢野安剛，○吉田正治。

創刊号以来編集の顧問を務められ，陰に陽に編集委員の心の支えであった宮部菊男理事が8月26日心筋梗塞で永眠された。御冥福を祈る。

（吉田正治　記）

大学英語教育学会『通信』

『通信』第1号の発行は，JACET 創立後7年を経た1969年4月である。それまでの『会報』（年一回発行）に代って，このときから誌名も『JACET 通信』とし，内容も新らたにさっそうと登場している。いまと同じB6版で，創刊号は6頁だったものが，同年12月には，いわば立て続けに，早くも4号が，しかも16頁にまでふくれ上って発行されている。当時の JACET の，いかにも若々しく，あふれるばかりのエネルギーを肌に感ずる思いがする。その後，平均して年に3回発行され，頁数も16号（1973）の4頁のものから，ハワイセミナー特集をのせた30号（1978）の20頁とまちまちだが，そのときどきの動きを反映し，記録して今日にいたっている。

創刊号は奇しくも，前年（1968）秋の会長交替をうけて，小川「新会長」の挨拶と星山理事による「JACET 誕生の由来と小川新会長就任について」という理事が巻頭を飾っている。頁を開くと，朱牟田前会長の名前が見られ，芹沢理事や小池理事（当時できたばかりの研究企画委員会代表幹事であった），そして創刊号以来長年にわたり『通信』編集長であった田中春美氏をはじめ，今日もこの学会の中心になってご活躍の方々の名前が見られる。内容の中心は，夏期セミナーと秋の大会のこと，研究企画委員会設置と活動報告などで，今日の JACET の原型がそのまま横たわっている。

その後，号を重ねること40回。その一つ一つを開いてゆくと，夏期セミナーや秋期セミナー，大会や研究会や講演会，関西支部をはじめとする地方の動向，研究企画委員会の諸活動の報告，さらにまた，シリーズで展開された「誌上討論：英語教育の目的は何か」，日本人，外国人による英文寄稿 “Opinions” の連載（これらを企画し指揮したのは中村 敬氏，名編集者であった），そして現在進行中の「私の授業・私の研究」等々，JACET の活動と運動の，忠実なと

は言えないまでも，大よその軌跡を改めて見直すことができる。そして言うまでもないことだが，これらの活字になった報告の背後に，諸活動に関わり，参加した会員の姿が重なる。待ちに待った原稿が速達便で届いたときの安堵感なども思い出される。短いようで長いこれらの年月に，実に驚くほど多くの人びとをまきこみ，その熱意と誠意と努力と時間を結集してきたものだという感慨にふけらないではいられない。　　（田中駿平　記）

『英語の評価と教授』出版

J. B. キャロル著　大学英語教育学会編・訳注　大修館　1972年

本書は1969年11月の第1回秋期セミナーで著者が行なった講義を研究企画委員が訳注したものである。カッコ内は各章の訳者。 I 外国語テストの問題点（田中春美） II 言語教育の評価基準（五十嵐康男） III 英語教授の心理的諸相（田中駿平） IV 試験問題作成上の実際的問題（松山正男） V 大学入試における評価の役割（小池生夫）　小川芳男会長のはしがきの他に，巻末には原文の全英文と，小池氏による詳細な解説があり，特にこのセミナーの参加者の決議として「大学入試改善の基本的見解」および JACET の活動が詳細に記されている。

（松山正男　記）

入試問題検討委員会

本学会は大学入試の改善を標榜して，『1971年度大学英語入試問題の検討』（開拓社，1971年10月20日）および『1972年度大学入試英語問題の検討』（開拓社，1972年8月25日）を出版した。この第1集・第2集に類するものとしては，文部省大学学術局編の「大学入学者選抜試験問題作成の参考資料」と全国高等学校長会編の「大学入試問題所見集」が挙げられるが，大学側が入試問題を検討し世に問うたのは初めての試みであった。入試改善に関する研究討議は，例年の大会などにおいてもなされてきたが，1969年秋に発表された「大学入試改善の基本的見解」の声明が，検討集発刊の強力な引き金であった。この声明は，testing の世界的権威として知られる Dr. John B. Carroll を招いて開催され

た3日間にわたる特別セミナーの参加者の総意をまとめたものである。

この基本的見解に準拠して入試問題を検討する作業が，1971年4月から開始され，約6か月後に，恙なく第1集の上梓にこぎつくことができた。その目次内容は，I. 概括的検討：(1) 問題の内容と程度，(2) 出題形式，(3) 出題量と検査時間，II. 内容別の検討：(1) 語いに関する問題，(2) 読解力に関する問題，(3) 作文力に関する問題，(4) 文法に関する問題，(5) 発音に関する問題であり，梶木隆一理事を委員長とする小池生夫，松山正男，五十嵐康男，田島　穆，田中駿平，中山隆吉，高木道信の研企委員からなる入試検討委員会のメンバーが執筆を担当した。翌1972年度の第2集は，さきの第I章を「概観」として短かくまとめ，新たに第 III 章として，参考資料（Native Speakers のアンケートより）を組み入れたことが，第1集と異なる特色であった。このアンケートは，客観テストで複数の解答が予想されるものなど日本人の語学力では十分に解明できない問題点を指摘して，夏期セミナーの外人講師2名および滞日中の教養あるアメリカ婦人27名の意見を徴したものである。第1集の II (4) に，その一部を紹介したところ好評を博したので，独立した章を設けたものである。第2集を編むにあたっては，前記のメンバーの他に，久泉鶴雄，国吉丈夫，楠瀬淳三，中村　功，島岡　丘の各委員の協力が得られた。

第1集・第2集の刊行の結果，書評に取り上げられるなどの反響があり，本学会以外の方面からも続刊を要望する声が聞かれたので，ある程度まで当初の目的は達成されたと言えよう。引き続いて，1973年度も問題検討の作業が進められたが，諸般の事情から，単行発刊を断念せざるを得なくなった。幻の第3集は「入試問題検討委員会報告」として，『紀要』第4号に発表されるにとどまったが，近い将来，既刊の検討集に類するものが，具現化する機会が訪れることを期待したい。

（高木道信　記）

月 例 研 究 会

月例研究会は，1971年4月8日に発足した。以来，夏期セミナー・大会など JACET の活動が多忙を極める時期を除いて，毎月，定期的に研究会が開かれている。発表者，所属大学（当時），題目は下記の通りである。

第1回　(1971. 4): Paul Pimsleur (New York State Univ.) 'Language

Aptitude Testing'

第2回 (1971. 5): Peter Milward (上智大)「英語の授業における文学の導入」

第3回 (1971. 6): 鈴木孝夫 (慶応大)「ことばと文化と英語教育」

第4回 (1971. 7): Everrett Kleinjans (East West Center 所長) / Mark Lester (Hawaii Univ.) 'Curriculum Center in Japan'

第5回 (1971. 9): Peter Strevens (Essex Univ.) 'Applied Linguistics and English Teaching'

第6回 (1971. 12): 外山滋比古 (お茶の水女子大)「英語教育における文学の位置」

第7回 (1972. 5): 高梨健吉 (慶応大)「英学史の立場から見た英語教育の目的の変遷」

第8回 (1974. 4): Walter A. Cook (Georgetown Univ.)「格文法とその応用」

第9回 (1974. 5): 鈴木紘治 (成蹊大)「英語教育における改善点」/ 五十嵐康男 (成城大)「アメリカの大学——カリキュラムと研究方向」

第10回 (1974. 6): 若林俊輔 (東京学芸大)「教育工学」/ 松居 司 (慶応大)「新しい教育機器の紹介」

第11回 (1974. 8): Kenneth L. Pike (Michigan Univ.)「Tagmemics を新しく展開した Grammatical Analysis」

第12回 (1974. 12): 高木道信 (千葉商科大)「メタファーの図式化」/ 岡田純枝 (東洋女子短大)「オックスフォード雑感」

第13回 (1975. 2): 田島 穆 (宇都宮大)「言語理論と教授法」/ 松山正男 (東京工大)「オセアニア周遊記」

第14回 (1975. 3): Bernard Choseed (Georgetown Univ.) 'English as a Foreign Language in U.S. and Japan'

第15回 (1975. 4): John Moen (アイゼンハワー大)「世界の英語教育事情」/ 佐藤史郎 (女子聖学院短大)「読書力の向上に関する実験についての報告」

第16回 (1975. 5): 河野 護 (筑波大)「単位の認定制と検定制——特に検定制のグレード決定基準について」/ 中村 敬 (鶴見大)「英語教育と文化の問題」

第17回 (1975. 6): 清水克正 (名古屋学院大)「生成音韻論における最近の

問題について」/ 小池生夫（慶応大）「Georgetown Univ. と Center for Applied Linguistics と TESOL の活動について」

第18回 (1975. 9): 星山三郎（東洋女子短大）「パプア・ニューギニアのことばについて」

第19回 (1975. 10): 原沢正喜（慶応大）「言語文体論について」

第20回 (1975. 11): 森戸由久（東京電機大）「アメリカの中の日本文化・最近のアメリカ語について」/ 楠瀬淳三（上智大）「生成意味論について」

第21回 (1976. 1): 天野一夫（大妻女子大）「どういう英語を教えるか——一つのアプローチ」

第22回 (1976. 2): 小川芳男（JACET 会長）「これからの外国語教育の課題」

第23回 (1976. 3): L. E. Phillip（オーストラリア大使館参事官）「オーストラリア事情——文化と教育」

第24回 (1976. 4): H. E. Wilkinson（青山学院大）'Japanese English'

第25回 (1976. 5): 伊藤嘉一（東京教育大）「ハワイで感じた日本の英語教育」

第26回 (1976. 6): 池上嘉彦（東京大）「'do' を中心とする言語と 'become' を中心とする言語——場所論的仮説と言語における〈状態〉と〈変化〉の表現」

第27回 (1976. 7): John W. Black（オハイオ州立大）'The Relevance of Word Counts in Language Studies'

第28回 (1976. 10): 中山隆吉（立教大）「アメリカ留学報告」

第29回 (1976. 11): W. Twaddell (元ブラウン大教授) 'Teaching of English'

第30回 (1976. 12): 田辺洋二（早稲田大）「日本語教育を通して見た英語教育」

第31回 (1977. 1): 田島 穆（宇都宮大）「スライドで欧米各地をめぐる」

第32回 (1977. 2): 西村和夫（ハワイ大）'Cross-Cultural Communication and English Education'

第33回 (1977. 4): 山内久明（東京工大）「ケンブリッジにおける英文学研究と日本研究」

第34回 (1977. 5): 若林俊輔（東京学芸大）「パキスタンで考えた日本の英語教育」

第35回 (1977. 6): 討論会「大学英語教育の目的と現状の問題点」

第36回 (1977. 9): 討論会「大学英語教育の到達目標ないし中心をどこにおくか」

第37回 (1977. 11): 討論会「わが国の英語教育において避けて通れない問題は何か」

第38回 (1977. 12): 吉田正治（成城大）「Second-Language Acquisition 研究の最近の動向について」/ 国吉丈夫（千葉大）「イギリス（特にロンドン）における外国語教育」

第39回 (1978. 1): E. Berendt（千葉大）'Why are socio / psychological conditions necessary in Language Teaching?'

第40回 (1978. 2): 田辺洋二（早稲田大）「文法学習を音声練習にどう生かすか」

第41回 (1978. 4): G. Broughton（ロンドン大）'Structures, Situations and Notions: the identification of a language teaching base line'

第42回 (1978. 5): 奥津文夫（和洋女子大）「日・英の諺——その特質と背景」

第43回 (1978. 6): 鈴木佑次（慶応大）'A Generative Semantic Analysis of the English Modals'

第44回 (1978. 9): 久泉鶴雄（大妻女子大）「ジョージタウン大学留学報告」

第45回 (1978. 11): 朝尾幸次郎（日本大）「成分分析による英語動詞 'Have' の意味論的考察」

第46回 (1979. 1): 岡田純枝（東洋女子短大）「オックスフォード大学の英文学教育と研究」

第47回 (1979. 2): 清川英男（淑徳大）「リーダビリティとリスナビリティ」

第48回 (1979. 3): V. C. Bickley (Culture Learning Institute, East West Center) 'English as an International-intra Language'

第49回 (1979. 4): 堀口委希子 (聖心女子大) 'Complementation in English Syntax——A Generative Semantics Approach'

第50回 (1979. 6): R. Schumitt（ハワイ大）'Acquisition of Communicative Competence in a Second Language'

第51回 (1979. 9): 石川祥一 (洗足学園短大)「Reading 大学での研修報告」

第52回 (1979. 11): 樋口時弘（筑波大), 楠瀬淳二（上智大）「49th Linguistic Institute by LSA and 4th International Witingenstein Synposia に出席して——最近の言語学と言語哲学の動向——」

第53回 (1979. 12): 贊川アグネス光江（ハワイ大）「Bilingualism 維持に関する心理的諸問題」

第54回 (1980. 1): 久保田泰夫（山梨大）「小さな州の偉大な伝統——ロードアイランド民主制の起源——」

第55回 (1980. 3): 佐藤史郎（女子聖学院短大）「"Cloze Test" の能力テストおよび診断テストの妥当性について」

第56回 (1980. 4): 星野一夫（白鷗女子短大）「私と英語教育」

第57回 (1980. 5): James R. Nord（ミシガン州立大）'Growing a Second Language through Listening'

第58回 (1980. 6): 隈部直光（大妻女子大）「英語教育の常識」

第59回 (1980. 9): Ronald W. Thornton（大妻女子大）'Teaching English in Context——A Criticism of Abstract Examples in Japanese English-Language Textbooks——'

第60回 (1981. 1): 大友賢二（神奈川大）「UCLA 留学報告——外国語テストの諸問題」

第61回 (1981. 3): Götz Wienold (Universität Konstaz) 'Some Uses of Linguistics in Analyzing, Evaluating and Designing Teaching Materials for English as a Foreign Language'

第62回 (1981. 4): 小池生夫（慶応大）「第2言語としての英語の習得；文法と strategy」

第63回 (1981. 5): 久下沼 篤（茨城高専）「米国における最近の英語教育事情」/ 栗原久江（目白学園女子短大）'The Japanese Attitudes and Motivation in Learning English'

第64回 (1981. 6): 柴山森二郎（群馬大医療技術短期大学）'Ways to Be a Successful Foreign Teacher'

第65回 (1981. 9): 村田 年（千葉大）「英語辞典における語義の記述について——(1) LDCE の語義の記述について, (2) 英和辞典の語義記述のあり方」

第66回 1981. 10): 大津由紀雄（東京学芸大）'Universal Grammar and Syntactic Development in Children'

（田島 穆・久泉鶴雄 記）

教材研究委員会

教材研究委員会は昭和47年に発足し，今日まで一貫して大学教養課程における講読用教科書のあるべき姿についての研究調査を続けてきた。

同時に，より実践的な仕事として，講読用教科書の編集出版も行った。まず中級用として52年に *Language and Culture* II を，55年には初級用として *Language and Culture* I を出版した。特に第1作の場合には，JACET 会員に広く素材の提供を依頼し，出版後も多くのアンケート調査を行ったり，使用された先生方との懇談会を開いたりして，我々の研究に役立てることができた。なおこの間，学生の英米文化に関する知識，教養を高める目的で編集した *Gems of English Prose and Poetry*（英米詩文珠玉選）も53年に出版した。

そしてこれまでの研究調査や教科書出版から得た情報，知識をもとに，本年は「大学一般教養課程における講読用教科書のあり方」と題する報告書を創立 20 周年事業の一環として発表した。この報告書作成に本格的に取りかかったのは54年秋であるが，その後本年秋まで約2年間に亘り，ほぼ毎月1回の各委員による研究発表と討論，合宿討議などを通じ，文字通り14人の委員が一致協力し，かつ原沢理事の良き指導，助言も得て，着実にこの仕事を推進してきたと思う。大学の教材についてのこの種の総括的な報告書は未だ発表されたことがないので，その反響は大きいであろうと期待している。この報告書に対する批判や意見をもとに今後も更に教材のあり方について研究を続けていきたいと考えている。

（現在の教材研究委員は，古川尚子，原岡笙子，清川英男，栗原久江，楠瀬淳三，松坂ヒロシ，森住　衛，中村匡克，奥津文夫，高木道信，田口孝夫，田村文子，田中英史，吉村紀子の14人であり，顧問は原沢正喜理事である）

（奥津文夫　記）

テスト研究開発委員会

JACET におけるテスト研究開発の基盤は，1969年から1971年の期間に築かれたといえよう。この間に活躍した「大学生のヒヤリング能力の実態調査」のための委員会（天野一夫，五十嵐康男，小池生夫，古宮照雄，島岡　丘，鈴木

博の各氏）の結成がまず取上げなければならない。

その後，1971年から1972年までの期間，JACET，COLTD による大学レベルにおける技能に関する調査が行なわれた。これには，上記委員のほか，五十嵐新次郎，田島　穆，中山隆吉の各氏がさらに参加した。その結果，JACET–COLTD Listening Comprehension Test (From A) の作成が最も手近かな課題として浮びあがってくるにいたった。Form A は，天野一夫，坪井忠二両氏を顧問とし，その作成にあたっては，阿部　進，伊藤嘉一，河野　護，国吉丈夫，佐藤秀志，*松居　司，森戸由久，若林俊輔，吉田正治，島岡　丘，*鈴木博の各氏が参加した。1974年10月に完成された Form A は，さらに修正を加えて，1975年秋から毎年春秋2回全国の大学生その他によって利用されてきている。ちなみに，その受験者数は，1975年は7,444名，以下毎年9,219名，9,948名，10,068名，11,764名が利用し，1980年には14,859名の受験者があった。1980年現在累計は63,302名となっている。

このようにして作成された Form A を基として，その平行テストである Form B の研究開発が開始されたのは，1978年春のことである。その作成には，天野一夫，大友賢二，*国吉丈夫，河野　護，鈴木　博，島岡　丘，森戸由久の各氏が参加した。その完成は，1980年6月のことである。JACET のテスト開発の活動が開始されてから，じつに11年の歳月が流れている。このようにして初めての Form B の試験は，1980年秋，8,403名の受験者を得て実施された。1981年春の From A 受験者は10,244名に達し，この秋その第2回目として行なわれる Form B の受験者数がさらに期待されている。

作成された「英語聴解力標準テスト」の内容および分析結果の主な点は次のとおりである。**I.** テスト内容：Part 1 (True or False Type 20 問) Part 2 (Same or Different Type 20 問) Part 3 (Multiple-choice Type 10 問) **II.** 平均と標準偏差：(N＝650) Form A ($\bar{X}$＝36.0, SD＝28.7) Form B ($\bar{X}$＝35.0, SD＝28.9) **III.** Form A と Form B の相関 0.769 **IV.** 信頼度係数 (KR 20) と測定誤差：Form A (0.837, 11.59), Form B (0.847, 11.31) となっている。

（大友賢二　記）

大学英語教育に関する実態調査委員会

今回，JACET 創立20周年記念事業の一環として大学の一般英語（教養課程としての英語）教育についての実態調査を行うことになった。これは大学の一般英語の実態をできるだけ正確に把握し，大学英語教育の改善に資することを目的としている。

JACET では，すでに昭和43年に第1回の調査（『大学英語教育改善を目標とする基礎実態調査報告書』大学英語教育学会，1968）を行っており，大学の一般英語教育についてのかなり詳細なデータを得ている。しかし，この際の調査は主に教材面に関するものであり，時代の推移による実態の変異をも考慮して，今回再び調査を企画することになった。

したがって今回の調査では，一般英語の目的・目標，教授方法，教材，教授メディア，クラス，入試問題，組織，教員の英語教育観等全般にわたって調査を行うことになった。当初，専門教育としての英語教育，英語科の教員養成，大学院での英語教育等についても併せて調査する予定であったが，調査項目が多くなり，記入者に大きな負担を与えることを懸念して，次回に廻すことにした。

すでに調査表は，実態調査委員会で原案を作成し，JACET の全理事，全評議員，全研究企画委員に修正を依頼した後，正式なものを完成させて，全国の大学に発送の予定である。第1回目の調査母数は300であったが，今回はコンピュータ処理が可能となったので，より正確な実態を把握するために全大学を対象とすることにした。

前回の実態調査での調査項目は以下の通りである。① 推薦できるテキスト ② このテキストについての内容，撰択基準，授業形態 ③ 教養課程の英語教材の理想像 ④ 実際の授業方法の分析 ⑤ 授業計画 ⑥ 学生の受けている週あたりの授業の種類，内容 ⑦ 教員の担当授業時数 ⑧ 担当クラスの総人数 ⑨ 大学英語教育に関する教育テーマ，及び関心のある分野 ⑩ 教員間における連絡調整の方法。

今回の調査項目は次のようなものである。① 記入者の属性（所属学部，専門分野，海外研修の有無，大学英語教育経験年数，一週間の担当コマ数等）② 一般英語の目的 ③ 一般英語の到達目標 ④ 重点教授技能 ⑤ 技能別指導の有無 ⑥ 各技能における指導上の力点 ⑦ 評価方法 ⑧ 使用教材のジャンル ⑨

教材の決定方法 ⑩ 市販教材の問題点 ⑪ 不足している教材 ⑫ 録音テープの使用頻度 ⑬ LL の使用頻度 ⑭ 視聴覚教材利用の問題点 ⑮ クラスの構成 ⑯ クラスの定員 ⑰ 入試問題の作成者 ⑱ 入試問題の内訳 ⑲ 入試問題での音声テストの有無 ⑳ 一般英語の担当者 ㉑ 専任と非常勤の比率 ㉒ 外人教師の比率 ㉓ 外人教師の担当分野 ㉔ LL 補助員の有無 ㉕ 一般英語担当教員の英語教育観等。

なお第1回の調査委員会のメンバーは以下の通りである（アイウエオ順，敬称略）

理事　天野一夫，佐山栄太郎，五十嵐新次郎

委員　池　　稔，笠井貴征，小池生夫，古宮照雄，鈴木紘治，田中駿平，富田和夫，中島茂夫，永井みち子，可児百合子，松山正男，松田勇三郎，山口隆夫，山本俊樹，吉田正治

また今回の調査委員は次の通りである。

理事　小池生夫

委員　　伊藤嘉一，伊部　哲，原岡笙子，古川尚子，升川　潔

（伊藤嘉一　記）

日本英語教育改善懇談会

1972年11月23，24，25日，八王子市にある大学セミナー・ハウスで第1回日本英語教育改善懇談会が開催された。JACET，全英連，語研，ELEC，LLA，COLTD，新英研，GDM，日本英語教育学会，中部地区英語教育学会，中国地区英語教育学会とわが国の主要な英語教育研究団体を網らする形で，この意義あるいわゆる改善懇が発足したのである。小川芳男会長，小池生夫理事の尽力による CCEJ（在日英語教育協力委員会）からの資金，積極的な他団体への働きかけ，事務局担当など JACET の大きな陰の力によって実現したものであった。

第1回の改善懇では各団体の紹介および活動報告と，「選択か必修か」，「授業時数」，「教員の研修」，「入試」と四つのテーマで討論会が行われ，結果は大部の報告書となって出版された。第2回大会は1973年12月8，9日に開かれ，討論のテーマとなったのは「英語教育環境」と「教員の研修」である。1974年の第3回大会では，参加者は各団体の代表者というのではなく，団体所属の個

人的な参加者であるという確認がなされ，アピール文がまとまり発表された。

1. 学習指導要領について（指針であって規制するものとしない），
2. 授業時数とクラスサイズについて（1クラス20名以下，週最低4時間，担当時数15時間まで），
3. 教員の研修について（制度的，財政的裏づけの要）

がその内容であった。

以後毎回アピール（'75，'76，'77，'80），要望書（'76，'77 臨時，'78 臨時），呼びかけ（'78），あるいは報告（'79）などの名称で大会の総意がまとめられ発表されてきた。これらの中で扱われた問題には第1回アピールの問題のほかに，教科書検定，採択，貸与制度，教員養成，視聴覚機器，国立大学共通一次試験，学級編成，入試改革（音声テスト導入，正解公表）などがあった。

参加者の所属団体として1977年以来全英連の名前がなくなった。加った団体は九州英語教育学会，四国英語教育学会，関東甲信越英語教育学会，全国高等専門学校英語教育連絡協議会，全国語学教師協会（JALT）である。

（國吉丈夫　記）

海外資料研究会

昭和51年のある企画委員会の席上お互いの勉強をかね，最近の海外論考の翻訳・紹介という仕事はどうか，と提案したところ，予想外に同席の皆さんの賛同を得，海外資料研究会が発足する運びとなった。当初は田中春美・田島　穆の諸氏のご協力を得て大修館「英語教育」に毎号1頁ずつ紹介記事を載せることになった。厳しい現実を前に，あまり拡大しないことが私の一貫した方針であった。早いものでもう足かけ4年目に入っているが，この間陰に陽に吉田正治氏のご協力があったことを特記しなければならない。

現在は矢野安剛氏をヘッドに6人の委員が所属しており，新たな展開期を迎えたといえる。これまでの成果をどう生かし，まとめていくか，現状を踏まえながら今後の展開をどうするか，など真剣な討議が行われている。紹介ばかりでなく，当初予定した翻訳もそろそろ課題に加えていきたい気持は今も変っていない。今後とも諸兄姉のご批判を賜わりたい。

（中山隆吉　記）

JACET 賞について

わが国の英語教育の改善と発展につくした人のために，語研にはパーマー賞（昭25設定）と市河賞（昭42設定）の2つがある。前者は主として，中等学校における英語教育の実践面に功績のあったものに，後者は広義の English Studies における優れた論文によって与えられるものである。大学の教員を対象とし，これらの賞に対応するのが JACET 賞（昭52設定）である。

小川芳男氏は JACET の会長として尽して来られたが，昭和52年学会に活を入れようと金100万円を寄付された。理事会および企画委員会で，これを消耗品などに使ってしまうのは惜しい，長く学会のために残るものにすることを決め，これを基金とし，学会賞のようなものを設けてはどうだろうかと云うことになった。これには全員が賛成。所で賞の名前をどうつけようか，理事会でも企画委員会でもいろいろの名前が出されたが，結局ありのまま「大学英語教育学会賞」とすることに落ついた。しかしこれは一息では云えない長い名前だから通称としては，学会の英訳名 Japan Association of College English Teachers の頭文字を取って JACET とし，「ジアセット賞」と呼ぶことにした。次に選考委員であるが，会長は理事会に計り次の7名を選考委員に委嘱した。（昭52・5・29）。

星山三郎（選考委員長），松山正男，小池生夫，田中春美，五十嵐康雄，奥田夏子，井上和子。

なお，本賞の規約は以下の通りである。

大学英語教育学会賞規約

前　文

大学英語教育学会（JACET）は，このたび小川芳男氏より寄附があったのを機会に本学会に賞を設けることにする。

規　約

1. 本賞は大学英語教育学会賞（略称 JACET 賞）と称する。
2. 本賞は，わが国における大学英語教育の向上，発展に資することを目的とする。
3. 本賞は，英語教育に関する高度の専門的研究，または実践面における活動を通じて大学の英語教育の発展に貢献した者に，毎年1回与えられる。

4. 本賞の選考のために，会長は理事会の意見を徴して選考委員若干名を委嘱する。会長は，選考委員会の答申を受け，理事会の承諾をえて受賞者を決定する。
5. 本賞の選考の詳細については，別に定める内規による。
6. 本賞に関する事務は，本学会研究企画委員会がこれを行う。
7. 本規約の改正は，必要に応じて，理事会がこれを行う。
8. 本規約は昭和53年4月1日から実施する。

（星山三郎　記）

関西支部10年の経過

前述大浦先生の記事にみられる由来を経た後，昭和46年（1971年）の1年間が支部設立のための準備期間にあてられた。鴨川沿いの国家公務員京都宿舎御車会館の1室に集まった関西地区在住の評議員と研究企画委員のたてた関西リアリズム方式にもとづいて，その年内に4回の公開研究会をもち，その結果をみることになった。交通の便も考慮して，又院長の好意もあって，京都市の中央に位置する平安女学院短大で第1回研究会がもたれたのは5月8日であった。続いて京都大学で6月19日（紛争のため校舎が使えず急拠再び平安女学院に会場変更をしたのも今ではなつかしい），9月18日関西外語大，12月11日関西大学天六学舎でそれぞれ有志呼びかけの研究会が開かれた。毎回熱心な数十名の会員・非会員の聴衆が集まった。かくして47年6月，小川会長による支部結成の通知と JACET の案内書が，関西地区の全大学教師に配布され，6月24日，再び平安女学院で支部発会式並びに第1回支部大会が開かれた。支部長には当時京都大の大浦教授が正式にきまった。以来，春秋2回の支部大会を開き今日に及んでいる。又49年より全国大会も関西地区で隔年に行なわれることになった。支部大会だけで，今までに毎回1つの講演と2つ以上の研究発表がなされてきた。

昭和 47 年（1972年）　6 月　発会式・支部大会（平安女学院）
　　11 月　秋季大会（京都産業大学）
〃　48 年（1973年）　5 月　春季大会（神戸大学）
　　11 月　秋季大会（奈良教育大）
〃　49 年（1974年）　5 月　春季大会（同志社女子大）

10 月　第13回全国大会（平安女学院）
〃　50 年（1975年）　6 月　春季大会（大阪女学院）
11 月　秋季大会（京都工繊大）
〃　51 年（1976年）　5 月　春季大会（神戸女学院）
10 月　第15回全国大会（関西大学）
〃　52 年（1977年）　6 月　春季大会（梅花女子大）
11 月　秋季大会（甲南大学）
〃　53 年（1978年）　6 月　春季大会（京都外語大）
10 月　第17回全国大会（竜谷大学）
〃　54 年（1979年）　6 月　春季大会（神戸商科大）
11 月　秋季大会（立命館大）
〃　55 年（1980年）　6 月　春季大会（神戸市外語大）
10 月　第19回全国大会（ノートルダム清心女子大）
〃　56 年（1981年）　6 月　春季大会（京都教育大）

この支部大会を機に，研究会発足以来10年間，支部の中心であった大浦教授が支部長を辞任され，安藤教授がつがれることになった。発足以来，支部の運営には関西地区在住の全評議員と研究企画委員が合同で当り，運営委員会を構成し，すべてその合議にもとづいて行なわれてきた。支部大会以外に1年に数度の講演会及び談話会ももってきた。どの会も，毎回熱心な会員と運営委員会の努力，更に支部大会の毎に必らず出席して下さる小川会長と歴代代表幹事などの熱意の賜で盛会をみてきた。現在の会員は230名を数える。

（多田　稔　記）

JACET 年 譜

年	月 日	事 柄
1962	11月 9日	大学英語教育協議会，東京外語大にて総会を開く。席上，大学英語教育学会の創立が決議され，わが国で初めての大学英語教育における本格的な学会が誕生。出席者 120 名。この総会が大学英語教育学会大会の嚆矢となる
1963	4 8	役員の選出なる。会長：朱牟田夏雄。理事：天野一夫，萩原恭平，星山三郎，五十嵐新次郎，稲村松雄，石橋幸太郎，梶木隆一，宮内秀雄，小川芳男，佐山栄太郎，芹沢 栄，上野景福，山田和男
	10 1	『会報』創刊号，発行の運びとなる
	11 8	第 2 回大学英語教育学会大会を法政大にて開催
1964	11 6	第 3 回大会を東京外語大にて開催
1965	10 15	第 4 回大会を東京大（教養学部）にて開催
1966	10 16	第 5 回大会を明治学院大にて開催
1967	7/17～8/4	第 1 回大学英語教育学会夏期セミナーを東京都八王子市大学セミナーハウスにて開催
	10 16	第 6 回大会を東京大（教養学部）にて開催
1968	7/15～27	第 2 回夏期セミナーを開催
	10 1	会長，朱牟田夏雄より小川芳男に交代
	10 25	第 7 回大会を明治学院大にて開催
	11 15	「大学英語教育改善を目標とする基礎実態調査報告書」を作成。大学の現行教材一覧を『会報』に収録
1969	1 11	研究企画委員会が発足。代表幹事：小池生夫
	4 30	『JACET 通信』創刊号，発行の運びとなる。これより『会報』は廃刊
	7 13	萩原恭平理事，死去
	7/14～8/2	第 3 回夏期セミナーを開催
	10 17	第 8 回大会を学習院女子短大にて開催。佐山栄太郎

年	月 日	事　　柄
		・上野景福，理事を辞任。原沢正喜・宮部菊男，理事に就任。
	11/6～8	第1回秋期セミナー（John B. Carroll 特別講演会）を大学セミナーハウスにて開催
1970	7/12～8/2	第4回夏期セミナーを開催
	10 23	第9回大会を慶応大（三田）にて開催。『大学英語教育学会　紀要』創刊号，発刊の運びとなる
1971	2 9	宮内秀雄，理事を辞任
	2 24	入試問題検討委員会，発足
	4 8	Paul Pimsleur 講演会，国立教育会館にて開かる。これより月例研究会が発足
	7/12～22	第5回夏期セミナーを開催
	10 20	『1971年度　大学英語入試問題の検討』（開拓社）を出版
	10 24	第10回大会を日本女子大にて開催
	11/20～23	第2回秋期セミナー（Robert Lado 講演会）をELEC 会館にて開催
1972	3 1	『英語の評価と教授』（John B. Carroll 著　大学英語教育学会編・訳注，大修館書店）を出版
	3 15	JACET 基金設立（朱牟田夏雄前会長夫人死去に伴う寄付金を基礎とする）
	5 10	教材研究委員会，発足
	6 24	関西支部発足。平安女学院短大にて大会を開く。支部長：大浦幸男。幹事：多田　稔
	7 10	日本学術振興会米国派遣研究者の推薦制度始まる
	7 23	研究企画委員会代表幹事，田中春美に交代
	7/26～8/12	第6回夏期セミナーを開催
	8 25	『1972年度　大学英語入試問題の検討』（開拓社）を出版

年	月 日	事　　柄
	10/14～15	第11回大会を立教大にて開催
	10 20	海外向け案内用に *The Ten-Year History of JACET* を編集
	11 18	関西支部大会，京都産業大にて催さる
	11/23～25	第1回日本英語教育改善懇談会に参加
1973	4 1	研究企画委員会代表幹事，松山正男に交代
	5 26	関西支部大会，神戸大にて催さる
	7/11～29	第7回夏期セミナーを開催
	10/27～28	第12回大会を東京学芸大（小金井）にて開催
	11 10	関西支部大会，奈良教育大にて催さる
	12/8～9	第2回日本英語教育改善懇談会に参加
1974	4 27	Walter A. Cook 講演会，上智大にて開かる
	5 11	関西支部大会，同志社女子大にて催さる
	7/15～28	第8回夏期セミナーを開催
	8/20～22	Kenneth L. Pike 講演会，上智大にて開かる
	9 21	朱牟田夏雄，顧問となる。大浦幸男，理事に就任
	10 6	第13回大会を平安女学院短大にて開催
	10 24	Arthur Spicer 講演会，上智大にて開かる
	11 15	稲村松雄，理事を辞任
	11/30～12/1	第3回日本英語教育改善懇談会に参加
1975	6 21	関西支部大会，大阪クリスチャンセンターにて催さる
	7/13～26	第9回夏期セミナーを開催
	8 9	Listening Comprehension Test: Form A を COLTD と共同で作製
	10 5	第14回大会を千葉商科大にて開催
	11/29～30	第4回日本英語教育改善懇談会に参加
	12 5	五十嵐新次郎理事，死去
1976	6 5	関西支部大会，神戸女学院大にて催さる
	7/18～31	第10回夏期セミナーを開催
	10 10	第15回大会を関西大にて開催

年	月 日	事 柄
	11/27～28	第5回日本英語教育改善懇談会に参加
1977	2 10	*Language and Culture* Book Two（英潮社）を出版
	2 20	*Listening—The First Skill* Drill A（開拓社）を出版
	4 1	研究企画委員会代表幹事，五十嵐康男に交代
	6 11	関西支部大会，梅花女子大にて催さる
	7/10～8/22	第11回夏期セミナーをハワイ大および東西センターにて開催
	10 1	海外資料研究会，発足
	10 30	第16回大会を成城大にて開催
	12/3～4	第6回日本英語教育改善懇談会に参加
1978	2 20	*Gems of English Prose and Poetry*（英潮社）を出版
	3 20	『英語教育』に海外論文の紹介記事を掲載（4月号より）
	6 24	関西支部大会，京都外大にて催さる
	7 15	大学英語教育学会賞（JACET 賞）創設。小川芳男会長の寄付による金100万円を JACET 基金に組み入れ，これを賞の基金に充当。小池生夫・松山正男，理事に就任
	7/16～25	第12回夏期セミナーを開催
	10/28～29	第17回大会を竜谷大にて開催。さきに設けられた JACET 賞の受賞者なし
	12/2～3	第7回日本英語教育改善懇談会に参加
1979	6 9	関西支部大会，神戸商科大にて催さる
	7/16～28	第13回夏期セミナーを開催
	8 22	石橋幸太郎理事，死去
	10/20～21	第18回大会を国際基督教大にて開催。*The Teaching of English in Japan*（英潮社）の編集者，小池生夫・松山正男・五十嵐康男・鈴木紘治に JACET 賞贈らる

年	月 日	事 柄
	11 17	関西支部大会，立命館大にて催さる
	12/2～3	第 8 回日本英語教育改善懇談会に参加
1980	1 10	*Language and Culture* Book One（英潮社）を出版
	6 4	関西支部大会，神戸外大にて催さる
	7/21～8/2	第14回夏期セミナーを開催
	8 10	Listening Comprehension Test: Form B を作製
	10 20	一般会員1000名に達す（大学，英語学校などの団体も含む）。特別会員51社。名誉会員24名
	10/25～26	第19回大会をノートルダム清心女子大にて開催。JACET 賞，『英語教育学研究ハンドブック』（垣田直巳ほか編，大修館書店）・「大学生標準ヒアリングテスト Form A 及び Form B の作製」（テスト研究開発委員会）の 2 件に授与さる
	11/29～30	第 9 回日本英語教育改善懇談会に参加
1981	5 1	研究企画委員会代表幹事，田辺洋二（正）・国吉丈夫（副）に交代
	6 13	関西支部大会，京都教育大にて催さる
	7/20～8/1	第15回夏期セミナーを開催
	8 26	宮部菊男理事，死去
	9 12	東北支部発足。支部長：長谷川松治。幹事：畑中孝実・西村嘉太郎
	10 28	和文・案内用パンフレットを改訂，英文・案内用パンフレットを新たに発行
	11 11	『大学一般教養課程における英語講読用教科書のあり方』を出版
	11/13～15	第20回大会を早稲田大にて開催。JACET 賞，ICU 言語学科研究グループ（R. Linde 他 7 名）に授与さる。創立20周年記念事業の一環として『記念誌』を編纂

編 集 後 記

この小冊子は，大学英語教育学会の創立20周年記念事業の一環として編まれたものである。本学会の創立は1962年11月9日であるから，厳密に言うと，この時点では，JACET is in its twentieth year. であって JACET is twenty years old. ではないが，沿革と活動状況を紹介して，来たるべき年の飛躍に備えようとするものである。

編集の基本方針は，第1部・第2部を通じて誕生から現在に至るまでの全貌を網羅することであったが，企画から発行までの準備期間が短かかったことと編集委員の不手際から，統一を欠く部分もあることをお詫びしたい。巻末の年譜は，主として『通信』および，その前身の『会報』のバックナンバーを資料として作成したものである。しかし，十分な情報が得られず，編集委員の記憶をもとに関係者に問い合わせて事実確認をした箇所もあり，20年という歴史の重みを改めて知った次第である。末筆ながら，この欄を借りて，執筆を担当された方がたに，心より謝意を表したい。

1981年10月28日

大学英語教育学会創立20周年記念誌編集委員
小池生夫　松山正男　高木道信

大学英語教育学会「創立20周年記念誌」

発　行	1981年11月13日
編集・発行	大学英語教育学会
代表者	小川芳男
印刷所	オリエンタル・プレス 東京都中野区弥生町 1—55—11
発行所	大学英語教育学会 東京都新宿区揚場町 15 セントラル・コーポラス 108 号 (〒 162) 電話・東京 (03) 260 — 4680